

朝日連峰山麓

ハチ蜜の森から

No.27



ハチミツと蜜ロウソクいっぱいのお話です！
(茂市久美子・作 講談社)

ハチ蜜の森

採蜜ができるトチやキハダをはじめマンサク、コブシ、カエデ、ヤマザクラ、ドウタン、ウワミズザクラ、ミズキ、クリ、ハクウンボク、タラ、コシアブラ、センノキ、ヌルデ、クズ、イタドリ…と、数多くの蜜源樹や植物を抱える森のこと。ハチ蜜の森キャンドルは、その森の入り口にあります。

編集発行

ハチ蜜の森キャンドル

代表 安藤 竜二

☎990-1573 山形県朝日町立木 825-3

☎とファクシミリ 0237-67-3260

Mail アドレス mitsurou@alto.ocn.ne.jp

ホームページアドレス www.mitsurou.com/

発行日 2005年8月1日

阪神淡路大震災被災地キャンドル支援
リトルライトネットワーク活動
10年をふりかえって

※このコラムは、平成17年1月に、山形新聞社の勧めで「提言」覧に投稿させていただいたものを、一部加筆したものです。

「箱は壊れてたけど、蜜ロウソクは無事でした」。10年前、私の製造する蜜ロウソクが、阪神淡路大震災の被災地西宮市の郵便局で被災した。

電話を下さったそのお客様は、手に入った熱帯魚用ヒーター3本で、10日ぶりにぬるい風呂に入ったことや、届いた私の蜜ロウソクを灯して家族でほっとする夜を過ごせたこと、そして周辺の悲惨な状況について教えて下さった。まもなく、偶然同じ日に出荷していた神戸市にお住まいのお客様からも「主人があと三分早く出勤していたら、倒れた阪神高速で犠牲になってたはず」と、便りが届いた。

(なにかできないだろうか...)

以後、テレビや新聞が伝える悲惨な状況を見るたび、後ろ髪を引かれる思いがした。

やがて被災者の心のケアが問題視され始め、友人と思案し、被災地のクリスマスに多くの人の手作りロウソクを贈ることを思いついた。材料は、神社や寺院、結婚式場等で役目を終えたロウソク。一本の糸の両端を、溶かしたロウに浸して乾かす作業を繰り返すと、年輪のようにロウが付着する。やがて、一重一重に思いをこめたかわいらしいマンチャクのような双子のロウソクができる。

一本は作った人が、そしてもう一本は被災地の子供達が、気負うことなく、互いを思いながら同じイブの夜に灯しあう。ロウソクの包み紙の裏には、励ましのメッセージや絵を書いた。県内各地でおよそ600人の方が参加下さり800対のロウソクができ上がった。「山形でも多くの人が被災地のことを思っている」そんな事実を伝えたかった。

ロウソクを届けに現地に出かけ、夜明けのホテルから見下ろした被災地は、ブルーシートで一面青い色をしていた。一年近く経つとはいえ、その傷跡は凄まじかった。大きくひび割れたマンション、崩れたままの石垣、盛り上がった



イラスト
内澤旬子さん

道路。そこら中の空き地は「悲しい現場」だったことを物語っていた。

伊丹市で、ネイチャーゲームの会の代表をなさっている森信子さんが、私の願いを叶えて下さり、事前にロウソクをもらって下さる団体を幾つも探して下さっていた。

最初に案内していただいた小学校には、8人の子どもの遺影が飾られてあった。歓迎してくれた校長先生が、悲惨な状況だったことを静かに淡々と話して下さった。帰り際、子供達が遊ぶ校庭の、背後にそびえ立つ高速道路の残骸が「本当のことだぞ」と訴えかけてきた。

まるで頭を殴られたような衝撃を感じた。自分には浮かれたサンタクロース気分だったのではないか。一片のうがった気持ちだが、とても汚らしく思え、その後も訪ねる先々で受けるあたかなもてなしが申し訳なかった。

夜、森さんが仲間の皆さんと開いて下さった歓迎会で、そのことを素直に話すと、皆さんは「それでもありがたいんだ」と逆に励まして下さった。心のもやもやが、さーっと晴れたように感じた。被災地は、全体が優しさのオーラで包まれているようだった。大きさでなく、ずっとそこに居たいとさえ思えた。

あれから10年。小さな灯りで和の輪を広げるこの「リトルライトネットワーク」活動は、途中で被災地各地の追悼のつどいのロウソク制作に変わったが、県内各地そして宮城県にもその輪は広がり、多くの皆さんの力で、毎年2万本前後の手作りロウソクを贈り続けることができた。「1.17 KOBE」の火文字で有名な神戸市三ノ宮の「1.17のつどい」の初回に灯された6432本(当時の犠牲者数)のロウソクも、全てこのネットワークで作らせていただいたものだ。

また、有志たちと被災地5市で双子ロウソク作り会を開催したり、県内では巡回震災写真展、神戸を歌うシンガー「おーまきちまき」さんの

コンサート、悲惨な震災体験が綴られた本「黒い虹（あしなが育英会）」の朗読劇、被災地に咲いたひまわりの種配付、全国を走った神戸市民ランナーの歓迎点灯会なども開催することができた。共催下さった方々、協力下さった方々、協賛下さった方々、ロウソクを提供下さった方々、報道して下さったマスコミ各社、そして共に活動してくれた仲間達と、実に多くの人々に支えていただいた。振り返れば感謝の念でいっぱいになる。

嬉しいことがある。本県や近県で地震がある



神戸市「1.17のつどい」代表 中島正義さん来県

神戸市三ノ宮東遊園地で毎年開催されている希望と鎮魂のともしび「1.17のつどい」代表の中島正義さんと同市社会福祉協議会の小池裕さんが来県されました。

毎年、1月17日午前5時46分。中島さんの「黙とう」の声で、多くの人が犠牲者を思い、震災を振り返ります。その様子はニュースでも必ず放送されますが、その声はとても神聖な響きに感じます。中島さん自身、震災では命を落としそうな思いをなされたそうで、避難所でのいろんな問題が起き始めた時には、「このままではダメだ」と、復興対策委員会を呼び掛けて立ち上げた方でもあります。

来県にあたり中島さんは、「多くのロウソクで協力してくれた山形の皆さんに直接お礼を言いたかった。本当にありがとうございました」と御礼の言葉を下さいました。

また、各地の諸々の災害にも神戸は積極的に支援・交流なさっているお話も伺い、新しい役割をにない始めていることを感じました。

飛行機の時間に制限された二日間だったこともあり、協力して下さった全団体はまわれませんでした。山形観光もなさらず、庄内から置賜地方まで県内各地4団体をまわって下さいました。こちらこそありがとうございました。



と「大丈夫か」と被災地からメールや電話をいただくのだ。

痛みを知る人々がゆえに持つそんな暖かな思いやりの気持ちは、10年を節目に様々な形で被災地から全国に情報発信されている。なかなか災害を身近に感じられない私たちにとって、それはとてもありがたいことだ。そんな気持ちを無駄にすることがないように、災害をもっともっと身近に意識して生活していこうと思っている。

神戸で報告いたします！

「1.17のつどい」で協力した各地の皆さんの活動報告やこれからを話し合う場を「KOBEボランティア交流祭」で設けて下さることになりました。お近くの皆さんはぜひ足を運んでいただけましたら幸いです。

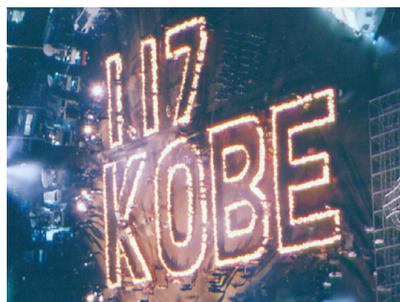
■8月27日（土）午前11:00～

神戸駅前ハーバーランド内スペースシアター

詳しくは

神戸市社協ボランティア情報センター

☎078-271-5306



リトルライトネットワーク

これからの活動について

中島さんによると、被災地各地で開催される追悼のつどいは、これからもまだまだ継続していくそうです。ロウソクの貯えもたくさんできたそうです。私も活動はスリムになっても、引き続きお世話係として、未長く協力していこうと思っております。今後とも、ご支援、ご指導の程よろしくお願致します。



ハチ蜜の森ニュース

アイスキャンドルの町北海道・下川町へ

こんな感じ！



歩くたびに雪は「キュッ、キュッ」と鳴き、どこまでも白く、さらさらと雪玉は作れず、除雪機の飛ばす雪もパウダースノー。軒下につらはなく、驚くことに車がブレーキを踏んでも滑らない…。

2月。たくさん氷のランタンにキャンドルを灯す「アイスキャンドル」で有名な北海道下川町へ蜜ロウソクづくりの講座で呼んでいただきました。昔、雑誌にきれいな写真で紹介されていたのをスクラップしていて、いつかは本物を見てみたいとずーっと思っていたのです。

とはいえ、地図を見ると下川町は旭川よりも北です。マイナス30度の町としても有名でした。同じ雪国山形ではせいぜい-10度です。実はずいぶん緊張して向かいました。

極寒の中、優しく灯るアイスキャンドルは、想像以上に美しく心惹かれるものでした。氷のランタンは水を入れたバケツを翌朝にひっくりかえして固まってない内側の水を流し出せば、簡単にでき上がるそうで、商店街はもとより、メインの会場はおそらく1000基以上のランタンで彩られていました。私も点灯を手伝ってきましたが、点灯後は展望台の上でしばし感動しておりました。

ところで、下川町は人口が5000人にも満たないのに、いろんなお店や活動があり、とても活気のある町に感じました。なかでも一番感動したのは、とてもおいしい小さな手作りパン屋さんです。春から秋は高原で営業しているのですが、冬になると商店街の駐車場の一角へ店舗ごと下りてきて営業しているのだそうです。帰り際によく見たら、その店舗はもともと大きなトラックの荷台に載っかっていました！

おかげさまで、たくさん刺激をいただいた旅になりました。

下川町の皆様、ほんとにお世話になりました。ありがとうございました。



ジョルジュ・ド・ラ・トゥール展で

五月末まで国立西洋美術館（東京・上野公園）で開かれていたラ・トゥール展のミュージアムショップにて、蜜ロウソクを販売していただきました。ラ・トゥールは、絵の中にロウソクの光源を置く独特の描画で有名なのですが、今回は、そのイメージ品として私の蜜ロウソクを選んでいただきました。日本で初、そしてしばらくは見られないであろうとされるラ・トゥール展で一役かえたことを光榮に思います。

森の名手・名人

みどりの感謝祭「森林の市」

4月29～30日。第16回森と花の祭典「みどりの感謝祭～森林の市～」(主催/農林水産省・林野庁・国土緑化推進機構他 会場/日比谷公園)で蜜ロウソク作りのミニ講座を開きました。

実は昨年度、国土緑化推進機構が全国から100人認定する「森の名手・名人」に最年少で選んでいただいたのですが、なんと全国の中から一人代表として、私が講座を開催することになったのです！と、書くといかにもですが、名手・名人の皆さんは、仕事一途の方や高齢の方が多ということで、ワークショップを行えるのは私しかいなかったのだそうです。(笑)

ともあれ、多くの親子連れの皆さんに参加いただき、懐かしい皆さんも訪ねてきて下さり、嬉しい二日間になりました。

山形県森林整備課の土屋隆一さんには、二日間献身的にご協力いただきました。りゅういち・りゅうじコンビで、楽しくやりましたが、彼の方が名手・名人だと勘違いした人も多かったようです。

座って蜜ロウソク作りできます！

工房2階は蜜ロウソク作りを体験できる場にしてありますが、高めの机と椅子だったので、小さなお子さんのご家族に不便な思いをさせておりました。この度、奥の六畳間に、残っていた旧大谷小学校からいただいた床板を貼り、うすべりを敷いて、座机を置きましたので、ゆっくり座って、体験できるようになりました。ぜひ、ご利用下さい。実は、私の昼寝の場所にもなりました。



ハチ蜜の森文庫⑧ (表紙紹介)

つるばら村のはちみつ屋さん

茂市久美子・作
講談社 1400円

(本文より抜粋)

ナオシさんにとって、春のこの季節は、一年じゅうでいちばんうれしい季節でした。元気にとびまわっている、みつばちたちを見ると、ナオシさんの胸には、春をぶじにむかえられた喜びと、春をぶじにむかえさせてくれた、山ノ神さまや精霊たちへの感謝の気持ち、あとからあとからわいてくるのでした。養蜂家で蜜ロウソクも作る主人公ナオシさんのやさしい物語。おかげさまで、今年の春は

うれしい季節になりました。

人気の「つるばら村」シリーズなどの作品でご活躍なさっている作家の茂市久美子さんは、ありがたいことに15年程前に朝日新聞に掲載された私の記事を大切にとっておいて下さり、以前に紹介した「トチノキ村の雑貨屋さん」というお話の一部ヒントにいただきました。

その後、茂市さんのファンでもあるお客様に教えていただいたことをきっかけに、私の蜜ロウソク講座に参加下さったり、この通信「ハチ蜜の森から」もバックナンバーから購読して下さいました。そして、茂市さんが帰郷の折、岩手県で養蜂を営む私の友人でもある藤原誠太さんの蜂場を実際に訪ねたりして、「ちゃぐりん」(家の光協会)という雑誌で連載なさいました。そしてこの春、つるばら村第五弾として、ついにきれいな本になりました。

出版前に、「原稿を確認して欲しい」と送って下さいましたが、茂市さんの入念な下調べや体験に裏づけられた内容は、空想ではないリアルなハチミツ屋の仕事そして思いを背景にあらわして下さいました。茂市さんの作品はどれも「だから惹かれるんだな」と、納得しました。

主人公のナオシさんは、以前に出されていた「つるばら村のくるみさん」に、橙色の蜜ロウソクとともに初登場してますし、今後もこのシリーズに登場予定だそうです。楽しみです。

ハチ蜜の森文庫おすすめ本



ななちゃんのたんじょうび

青柳ひろ江・作
福音館 410円

「ハチ蜜の森から」を定期ご購入下さっている山形県米沢市の童話作家青柳ひろ江さんから、最新作をいただきました。酪農農家の娘、ななちゃんは、自分の誕生日と牛の出産が重なってしまい、友達が集まっているのに、お誕生会どころじゃなくて落ち込んでましたが、…。

情報誌に紹介していただきました！

- ・「yutorino」(ユトリノ 白夜書房)
- ・現代農業増刊「なつかしい未来へ」(農文協)
- ・和の生活マガジン「さくら」6月号 (PR 現代)
- ・「BE-PAL」8月号 (小学館)
- ・「ふれあい」(全国農協観光協会)
- ・日経産業新聞「市場トレンド」
- ・山形情報紙「ういずy」

ありがとうございました。

蜜ロウソクでグラスハーブ演奏会

湯殿山注連寺鉄門海上人大祭にて

5月8日、湯殿山注連寺の即身仏鉄門海上人大祭において、グラスハーブの奉納演奏会が行われましたが、その傍らで私の蜜ロウソクを灯していただきました。演奏なさったのは、仙台市在住のグラスハーブ演奏者“ただの なおみ”さんです。

ただのさんは、自然や人々、動植物など、場の雰囲気を感じ取り、そこから受け取ったメッセージを音で表現できる方で、当日は注連寺の水や空気を感じながら、徳の深い即身仏鉄門海上人そして包み込む大自然に向け即興演奏を奉納なさいました。グラスハーブとはいえ、邦楽を聞いているような錯覚を覚え、気持ちよくなりながら拝聴しました。神聖



だけるのは御灯明製造業として、とても幸せなことです。

ちよっと変な遊び!?

ストーンサークル作り

娘ゆふみ(小5)の石好きがこうじて、裏の河原の5m四方の砂地に小さなストーンサークル作りを時々楽しんでます。もっぱらデザインは彼女。私はいつも蟻のように、せっせと石を運ばされております。近頃は、だんだん進化して、きれいな芸術に見えるようになりました。釣り人はきっとドキッとしているかも知れませんが。

でもちよっとマニアックですが、出来上がると、なんか不思議な安堵感というか安定感を感じます。せっかくなので、いつもハチ蜜の森キャンドルの発展と家族や友人の健康祈願を念じながら作ってます。ある時、出席できなかった東京の友人の結婚披露宴の日だったので「幸あれ」と念じながら作り、メールで報告したら、なんと屋外の披露宴で雨がぎりぎりまで降らなかったとのこと。ご利益があったと喜んでました!!

こうなったら、全国ストーンサークル作り愛好会を立ち上げて、世界平和を祈る縄文祭りをして…危ない世界にだけは入らないように気をつけます。

(笑)



蜜ろう利用術⑧

白蟻と蜜蜂が作る楽器

ディジェリドゥ

こんな感じでした→



東京杉並区の関根小百合さんから、オーストラリア源住民アボリジニの楽器、“ディジェリドゥ”にも蜜ロウが使われている旨、お便りをいただきました。関根さんは、かれこれ10年ほど前に、ハチ蜜の森キャンドルが中継された「ズームイン朝」をご覧下さり、それ以来、定期購読をして下さってます。東京で蜜ロウソク作り講座をした時には、助手としてお手伝い下さり助けていただきました。ご主人は、前号でも紹介した、古い型のリコーダーの40年来の愛好家でいらっしゃるそうです。

関根さんによると、ディジェリドゥはただの丸太棒で中心部がパイプ状に空洞になっているだけのもの。ところがこのパイプの穴はなんと白蟻に開けさせたものなのだそうです。関根さんご夫妻は現地で背丈を越えるような林立する蟻塚を見てその壮観さに驚いたそうです。そこにユーカリ等の木を置くと芯の部分を蟻が喰い尽くすのだそうです。そして一方の穴の吹き口に蜜ロウを塗ってなめらかにし、さらに蜜ロウを盛り上げることによって、吹き手に合わせた吹き口の楽器になるとのこと。

ここまで読んで、私も思い出しました。数年前に、講座の折に知人が持ってきたディジェリドゥの吹き口に蜜ロウを付けてあげたことがあったのです。その時は、名前も覚えられず変な楽器だなと思いましたが、まさか白蟻が関与していたとは驚きです。

その音について関根さんは「ボワァーという音が出て面白い」と書かれてますが、全くそんな感じでした。しかし、そんな単純な楽器なのに、ユニークで豊かな表現をすることができそうです。

まさに、白蟻と蜜蜂が作り出した自然の芸術楽器です。

蜜ぶたを切る

20 数年実家のハチミツの収穫を手伝ってきましたが、今年のはじめて「蜜ぶた（蓋）切り」の仕事に挑戦しました。

蜂達は貯えられたハチミツを、羽で仰いだり、口うつしで伸ばしあって、水分を蒸発させます。そして発酵しない濃度になると、巣穴にふたをして保存をします。採蜜時、これが付いたままでは遠心分離器で巣を回しても蜜は出てきませんので、必ず切り取らなければならないのです。

実は、この仕事をしていた両親が年老いはじめたので、代わるべく切り方を教わり、妻と共に新人デビューしたというわけです。しかし、思いがけず、これが痛いデビューとなりました。

蜜ぶた切りは、専用の包丁「蜜刀」を使います。反った両刃のもの、そして細長い刺身包丁があります。これらは、蜜口ウでできた巣を溶かし切るために、また、ハチミツのベタベタが抵抗にならないように、常に刃を熱湯の中に入れて熱くしておきます。

巣箱から取り出されて、持ち込まれる巣は、必ずしも平らな状態ではなく、大抵は凹凸があります。また、切ってはならない蛹（さなぎ）の巣が部分的に含まれていたりします。反った両刃の蜜刀は、そんな時にとっても有効なのです。

また、蜜を採り終えた巣板は次回の時にいくらかでも平らな巣になるように凹凸を切りそろえますが、この時はまっすぐで長い刺身包丁を使います。固い巣も、ぐいっと力を入れられます。

長年使っている両刃蜜刀をよく見ると、先のほうがとても細くなっていて、光沢もなく、新調したばかりのもの比べると貧相な蜜刀に見えました。しかし、使ってみると、断然この古い蜜刀のほうが切りやすいのです。面倒な細かい凹凸や木枠よりも浅い部分に作られた蜜ぶたもスイスイと切れました。まさに、研ぎ澄まされてきた結果が使いやすさとなって現れていました。

よく見ると、刺身包丁の方もまっすぐではなくてほんの少し反っていました。以前に父が、使いやすいようにハンマーで叩いたのだそうです。確かにこの少しの反りのおかげで、刃の上下方向のコントロールがきいて、巣に深く刺さることも浅いまま浮き上がってくることもないようです。



さて、いよいよ切り方ですが、巣板を立てて下から上へ蜜刀を泳がすようにさーっと切るのが理想です。ところが、巣には部分的にかたい所があります。そんな時には巣板を押さえる左手に力を入れ、右手の蜜刀にも力が入ります。実はこの時に痛い思いをしてしまうのです。

かたい所を切りおえた蜜刀が、勢い余って、巣板を押さえていた左手を切ってしまうのです。ゴム手袋をはめているので、深く切れることはめったにないのですが、今年は大小合わせると5回も切ってしまいました。私の左手は、いつも絆創膏がトレードマークのようになっていましたし、身替わりになるゴム手袋はすぐに穴だらけになり、シーズン中に何度も交換しました。ゴム手袋がなかったら、いったいどれだけ切っていたかと思うとぞっとしてしまいます。

左手は、最初から巣わくの影に隠すように押さえれば、あるいは、切り始めたら指を隠すようにするのが基本です。しかし、巣が不安定になり切りずらく、能率が悪くなるので、ぎりぎりまで指を隠さずじまいで、痛い思いをしてしまうわけでなのです。

しかし、実際にはわずかな能率の違いで、切った時に妻の助けを借りて絆創膏を貼る時間のほうが、よっぽど能率悪いと言えます。（笑）実際、シーズンを終えて振り返ると、一度も切らないで淡々とこなしていた彼女のほうがたいしたものだったと思います。

そういえば父母の時も、たびたび絆創膏騒ぎを起こしていたのは父のほうで、母がバックからさっと絆創膏を取り出すと、手慣れた様子で貼っていました。

ハチ蜜の森料理店 No.26

カリカリしそ梅

先日、料理店「ふくろう村」を営む友人が、梅のハチミツ漬けの方法を聞きにきましたが、実家に行って直接母から聞くように伝えました。

前にも紹介しましたが、母の戸棚の中には、梅はもちろんカリンや山ぶどう、サルナシ、マタタビ、ラッキョ、ニンニク、レモン、カボスなど、いろいろなハチミツ漬けがあるのです。特に梅は、柔らかいものから固いもの、青いもの、黄色いもの、赤いものと種類が豊富です。

友人と話していて思い出したものに、カリカリしそ梅を思い出しました。シソも入った赤いカリカリ梅をきざんだもので、甘酸っぱく、ご飯に汁ごとかけてかき混ぜて食べるのが大好きでした。おにぎりにしてもらうのも好きでした。しかも桜色のご飯になりましたから、まだ甘党だった私たち子ども三兄弟にとっては、楽しくうれしいおかずだったというわけです。

大人になって、砂糖で作ったものを時々旅館や知人宅で、ごちそうになることがあります。口に入れるとすぐに（違う）と思ってしまいます。まろやかさがなく、単調な味に感じてしまうのです。あるいは、あの頃のようなもつと甘いものを期待しているのかも知れません。

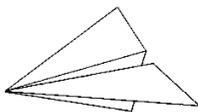
さて、友人の料理店では、どんな母の味に出会えるようになるのか。大いに期待しています。

ハチ蜜の森イベント

第7回 大暮山分校白い紙ひこうき大会

青空、ひまわり、麦わら帽子、
蝉の声、ラムネ、かき氷、笑顔、
年老いた木造校舎。

白い紙ひこうきがふわりふわり
たまにはもどってみませんか。
木造校舎の夏休み。ぜひ！



日 時/8月7日(日)午後1:00~

参加費/大人500円 高校生以下300円

会 場/朝日町大暮山 旧大暮山分校

大会記録/37.5m 川口靖晃さん(朝日町)

※受付終了3:30。4回飛ばせませす。

主 催/白い紙ひこうき大会実行委員会

協 力/大暮山区のみなさん

※私が実行委員長のイベントです。

かぼちゃランタンで小人の村づくり

かぼちゃをくり抜いて、ランタンを作り、紅葉した葉っぱの下に村のように配置して並べます。暗くなれば小人の村に見えてきます。

10月22日(土)午後1:30~暗くなるまで

会場は朝日自然観「大地」の予定

大人2000円 小人1500円

編集後記

「養蜂四方山話」でも書きましたが、その他にも、今年の春はなにかと左手を傷つけた季節でした。

なかでも、金串を刺した時はびっくりしました。型抜きした丸いロウソクをさらにろう浸けする時は、金串に軽く刺して行うのですが、なんの拍子かロウのみならず押さえていた左手中指に刺してしまったのです。しかも貫通です。中指の内側から入った金串が背中から出てきた様子は、なんとも恐ろしく、慌てて抜き取りましたが、まるで焼鳥を串からはずす時のような感触でした。思ったより痛くはなかったのですが、さすがに心配になり、病院で消毒とレントゲンを撮ってもらいました。先生に「骨に刺さって骨髄にばい菌が入ると大変だったぞ」と聞き、またぞっとしてしまいました。

それにしても人生を半分過ぎてやっと気づきました。「左手っていつもかわいそうで、偉いんだな」ということ。利き手の右手がいつも華やかになにかをするのだけれど、それをいつも地味に支えているのは左手で、あげくの果てに右手の失敗で痛い思いを度々受けてしまう。いったい一生のうちで何回右手にやっつけられてしまうのか！「左手の日を制定して休日にして、休ませてあげたいものだ」と、くだらないことを考えてしまいました。(笑)

しかし振り返ると、どちらかといったら、いつも右手のような人生を送ってきた気がします。多くの左手の人に支えられてきたことに改めて感謝の念を持ちながら、左手役もかっこいいなと思ってきました。

※定期ご購入(1000円で10冊4~5年分)は、ハチ蜜の森キャンドルまでお申し込み下さい。